

現代日本論基礎講読「論文作成の基礎」

第3講 パラグラフ

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] パラグラフを組み立てる

1 前回課題について

- 課題用紙に自分用のメモを書かないこと
- 奥付などに出版社の代表者名が書いてあることもあるが、それではなく、出版社の団体としての名称を載せる
- 出版年は漢数字や元号で書かれていることもあるが、文献表にのせるときは西暦の算用数字に統一する
- 「論文種別」は明記されていないことも多い
- 論文が雑誌に掲載されるまでのプロセスを理解しておくこと
- セクションのわけかたとセクション番号について (前回資料)

2 今回の課題

前回の授業で挙げたキーワードのうち、どれかひとつをえらび、それについて説明する 4-6 個のパラグラフを組み立てよ。

- 「主張」と「補足説明」を箇条書きで配列したものをつくる
- そのことばを聞いたことはあって、意味がぼんやりわかるが、くわしくはわからない、という人向けの説明をつくる

配布する小紙片を活用すること。

3 「パラグラフ」とは

「飛ばし読み」(skimming) できることの重要性。

各セクションの見出しは、skimming のための手がかりをあたえる。

→ では、セクションの内部に関しては?

Paragraph: ひとつの topic (小主題) について記述する文の集まり。改行して、1字下げる (教科書 p. 62)。

ひとつのセクション内のパラグラフの数は、3－6個程度が目安。

- ひとつの主張に関する文をまとめてパラグラフをつくる
- そのパラグラフの主張を目立つ位置に書く
- パラグラフを適切な順序にならべる

4 主張と補足説明

パラグラフには、ひとつの主張とそれに関する補足説明群を盛り込む。

4.1 補足説明の種類

| | | |
|-------|-------|-------|
| ・具体例 | ・詳細 | ・言い換え |
| ・抽象化 | ・一般化 | ・方法 |
| ・根拠づけ | ・原因 | ・結果 |
| ・評価 | ・引用 | |
| ・留保 | ・例外 | ・導入 |
| ・話題転換 | ・予備知識 | ・つけたし |

- この分類は網羅的なものではない
- ひとつの情報が複数の分類にあてはまることもありえる
- 補足説明の種類は、「主張」との関連できまる
- 補足説明にさらに補足説明を追加することはしない (そういうことが必要になった場合は、パラグラフを分割するか、注を使う)
- 「つけたし」はなるべくつかわないこと

4.2 教科書 pp. 59–60 の例

[主張 1] 積もった直後の雪はすきまだらけ
→ 詳細/言い換え: 密度が小さい

[主張 2] 時間がたつとしまる
→ 予備知識: 雪の結晶は互いに接している
→ 詳細: 水蒸気が凝結して「氷の橋」ができる
→ 詳細: 結晶の突起から蒸発して、すきまやくびれに凝結が起こる
→ 詳細: 突起がなくなり、まるくなり、「氷の橋」が太くなる
→ 詳細/言い換え: 密度が増す

[主張 3] 踏むとどうなるか

[主張 4] 密度が大きくなる
→ 予備知識: 片足に全体重を掛けたときの圧力は約 240g 重/cm²
→ 原因: 「氷の橋」と雪粒が破壊される

5 パラグラフの組み立てかた

- 主張を決める
- 関連して提示しなければならない情報をリストアップする。どんな読者を想定するかに注意。
- リストアップした情報を取捨選択
- 必要に応じてパラグラフを分割・統合・削除・追加する
- 注を活用することも考える

文章を書き始める前に、紙の上で構成を考えること。2つの段階を踏んで考えるとよい。

材料集め: 無秩序でよいので、思いついた／しらべた情報をメモしていく (教科書 pp. 25-29; 木村 1993, pp. 26-42)

→ メモ帳を持ち歩く; 思考マップ, 想定読者との問答 (配布資料)

配列と構造化: 材料が集まったら、どの主張をどんな順序に並べるか、主張のそれぞれにどんな補足説明をつけるかを決める。この時点で、鍵になる用語を決め、概念の定義をしておくといよい。

→ 構成表, スケッチ・ノート (教科書 pp. 52-54)

集めた材料のほとんどは捨てることになるのが普通である。

6 パラグラフの配列

起・承・転・結をわかりやすく配列して、ひとつのセクションをつくる。

起: そのセクションのいちばんはじめのパラグラフ

承: 直前のパラグラフからの自然な展開

転: 直前のパラグラフからの逆接的な展開

結: そこまでのパラグラフをまとめる

セクションは、通常、「起」ではじまり「結」で終わる。その間に、「承」「転」のパラグラフを必要に応じて配列する。ただし、「結」はない場合もある。「転」は逆接的な展開になるので、読み手に負担を与える。多用しないほうがよい。

7 宿題

今回の課題用紙は、提出せず、持ち帰ること。下記の宿題と一緒に、次回提出する。

- (1) 今日作成したパラグラフ構成をもとにして、4-6パラグラフの文章を書く (→2部用意)
- (2) できあがった文章について、今日の課題と同様に、主張と補足説明の配列を作成する
- (3) 参考にした文献などの一覧
- (4) 調査から執筆までの過程 (今日の課題を含む) について簡単にまとめる

コンピュータで作成して、印刷すること。A4判用紙の表のみを使う。全ての用紙の上端に番号と氏名を書き、**綴じないで** 次回提出。今日の課題用紙も、次回提出する。

提出するものとは別に、(1)の文章をもう1部 (つまり計2部) 用意してくること。次回は、この文章を受講者どうしで交換して、互いにコメントする。色ペンと国語辞書を持ってくること。

なお、中間レポート (なんでも批評) についての素材をそろそろ絞っておくのが望ましい (5/14に執筆計画提出)。

文献

川喜田二郎 (1967) 『発想法』中央公論社.

川喜田二郎 (1970) 『続・発想法』中央公論社.

木村泉 (1993) 『ワープロ作文技術』岩波書店.

大島弥生ほか (2005) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現: プロセス重視のレポート作成』ひつじ書房.

梅棹忠夫 (1969) 『知的生産の技術』岩波書店.